第 1 節　翻訳論と記号論

本節では、翻訳研究で、時には批判や忌避の対象として、やや偏執狂的な関心・欲望の対象とさえなってきた「等価性」という問題系について、（ポスト）分析哲学や科学論、言語学、認知科学、社会科学などで主要な問題となってきた「カテゴリー化」（範疇化）の議論、そしてパース記号論、およびヤコブソン翻訳論に結びつけて省察する。それを通じて、「翻訳」という事象を、言語や社会文化との関連において捉え直し、近現代翻訳研究の示す諸特徴を明らかにしようとする。また、等価性・カテゴリー化とその社会文化的コンテクストにおける変異について、ユダヤ教とアラム語、クルアーンと正則アラビア語の関係に焦点を当てて論じたうえで、文献学（翻訳論／解釈学）を通じた近代ナショナリズム、すなわち、言語相対主義の体制の生起と等価性との関連性について論議する。

第1節第1項　翻訳研究における等価性

はじめに、翻訳研究で言及される「等価性」についての導入的な論述を行っておこう。近年の翻訳研究では、等価性は「時代遅れのトピック」、もはや「禁句」である、などといわれており、1981年にはピーター・ニューマーク（Peter Newmark）が「死亡宣告」を行ってさえいる。それにもかかわらず、それから10年以上を経た1994年の時点までに、58種に上る、さまざまな類の等価性が論議され、この概念とそれに関する議論は「雑草のように蔓延る」とさえいわれる状況になっていた（Qvale, 2014［1998］: 222）。このような状況は、明らかに、この等価性という概念の重要性と、その理論化の困難さとを指し示している。

以下、翻訳研究における等価性に関する標準的な理解を、Kenny（2009

[1998]）から示しておく。まず、等価性は普通、（1）起点テクスト（原典）の要素と目標テクスト（翻訳）の要素とが同じ事物に言及していると思われる、あるいは、見なされているという言及指示的な等価性の原理、（2）起点テクストの語と目標テクストの語とが、それぞれの使用言語の母語話者の心に同一の、あるいは、類似した心理的連関を喚起するという心理学的ないし共示的な等価性の原理、（3）起点テクストの語と目標テクストの語とが、それぞれの言語で同一の、あるいは、類似した文脈で用いられているというコーパス言語学的ないしテクスト規範的な等価性の原理、（4）起点テクストの語と目標テクストの語とが、それぞれの読み手に同一の、または、類似した効果を持っているという語用論的ないし動態的な等価性の原理、（5）起点テクストの語と目標テクストの語とが、類似した書記的ないし音韻的、あるいは語彙・文法的な特徴を有しているという形式的な等価性の原理[1]、（6）起点テクストと目標テクストとが、プラハ学派、ハリデー機能文法や談話分析などにおける意味での、情報の流れや結束性の作り出し方の面で（Halliday and Hasan, 1976）、同一性や類似性を持っているという機能文法的ないしテクスト的な等価性の原理、など、言及指示や心理、文脈、語用論的効果、形式、情報・結束性といった、さまざまなレヴェルでの原理に基づいて措定されている（Kenny, 2009 [1998]: 96-98）。

これら、さまざまなレヴェルにおける全ての等価性が、翻訳に関わるあらゆる状況で重要な意義を持つとは考えにくく、翻訳者は、それぞれの状況で、どのレヴェルの等価性を優先させるべきかの判断を下すことになる。そのような状況的な適切性の判断に基づく等価性は、「機能的等価性」などと呼ばれることもあるが、単語から作品に及ぶさまざまなレヴェルにおいて別々に等価性の有無や程度を論じることができることは、聖書翻訳理論の泰斗であるユージン・ナイダ（Eugene Nida）が既に半世紀以上前に指摘している（Nida, 1964: 25; Tymoczko, 2014d [1985]: 65）。また、翻訳規範に関する議論において、翻訳のスタイルなどの特徴は、主に目標言語文化を志向しつつ、社会文化的な言及は起点テクストに由来するものであり続けるなど、言語に関わる異なったレヴェルで等価性の有無・程度・志向性が異なったものでありうることも指摘されている（Lambert and van Gorp, 2014 [1985]: 46）。このように言語にまつわるさまざまなレヴェルで、等価性の基準が異なったかたちで現れることは、コード・ス

イッチングにおいても観察され、たとえば、言語（変種）間のスイッチングが、音韻レヴェルでは見られないが語彙レヴェルでは看取されるなど、コード・スイッチングの有無や程度が言語学的なレヴェルにおいて異なることが一般的である。

現代翻訳研究の旗手の一人であるローレンス・ヴェヌーティ（Lawrence Venuti）も、等価性が単語のレヴェルだけでなく、文／センテンス、段落、章、テクスト全体など、さまざまなレヴェルで定立可能な概念であることを指摘したうえで、それにもかかわらず、翻訳研究での等価性をめぐる議論は、えてして単語レヴェルへ焦点化し、たとえば逐語訳（また、その類似概念としての直訳、その反対概念としての意訳や自由訳）に関する議論への拘泥が見られることに論及している（Venuti, 2019: 56-57）。翻訳研究において顕著である「単語」への焦点化は、言語人類学者マイケル・シルヴァスティンが指摘している「言語使用者たちのメタ言語意識の限界」、すなわち、（翻訳研究者も含む）言語使用者の意識が、表層レヴェルで分節可能な言及指示的ユニットへと――特に単語へと――焦点化してしまうという一般的な現象の1つの現れであると思われる（小山、2011a）。

語彙レヴェルでの等価性に関する議論では、上記のような「質的」な原理に加えて、「数量的」な原理に基づいて等価性が捉えられることも散見される。たとえば、Kenny（上掲箇所）もいうとおり、（1）起点テクストの1語と目標テクストの1語とが対応（つまり「1対1」等価的対応）しているケース、（2）前者の1語と後者の2つ以上の語とが対応（つまり「1対多」等価的対応）しているケース、（3）前者の1語が指す意味の領域の一部のみに、後者の1語が指す意味が対応（つまり「1対『1の部分』」等価的対応）しているケース、（4）前者の1語に対応する語が不在（つまり「1対無」の（非）等価的対応）のケース、などと等価性の下位範疇が措定されることが見受けられる。しかし、このような等価性へのアプローチに対しては、言語やテクストを静態的に実体化したうえで、それを基にした単純な数量的比較の操作を行っていること、語彙レヴェルのみに焦点化してしまっていること、さらに、「テクスト・レヴェル」（談話に現れるトークンのレヴェル）と「システム・レヴェル」（抽象的なシステムや構造に属するタイプのレヴェル）との階層的な差異[2]について無自覚で